

翔べ！
世界へ

マダガスカルという フィールド



調査地(マダガスカル内陸北東部、アラウ
チャ湖地方)での祭事にて(中央が筆者)

とき。そこに感じ取れるかすかな抵抗感は、およそ関係を取り結ぶということに不可避的につきまとう、ある種の手応えでしかないかのようなものである。関係のこの側面は、日本での人づきあいと、さして異ならない平面上に展開されていると思われたのだった。

隔たりと身近さ

だから、隔たりを単純に他者性に読みかえてはならないのである。マダガスカルというフィールドで私に起こったことは、他者を通じて自己を相対化するということではなく、そのような相対化を求める構えそれ自体を相対化する

ということであった。マダガスカルに「他者」はいなかったといいたいのではない。一見遠いマダガスカルの人々を、一元的かつ全面的に他者と規定することが誤りであったといいたいのである。そうであるとするれば、自己と他者との截然たる区分の上で、その他者を鏡として自己を相対化するというそもそもの目論見もくつがえされることになる。逆に、身近さを単純に同一性に読みかえることも、つまり、文化的背景を同じくするはずの隣人に、一元的かつ全面的に自己との同一性を期待することも、同様に誤りであろう。一見隔たつていようが身近にあるのが、他者と関係を取り結んでいる自己のその時々々の立場、その他者との関係で自己が占める位置に対して敏感に目を向けることが必要なのである。

帰国後、私はこのような視点を部分的に盛り込みながら、マダガスカルでの調査研究の成果を博士論文としてまとめた。現在は大学で教鞭をとっているが、「国際化」やら「グローバル化」やらに、わ

けも分らず目先を奪われて入学してくる学生たちは、こうした議論を提起されると、異国の隔たつた他者に思いを馳せるのと同時に、みずからの周辺の身近な他者にも改めて気づかされるようである。そうした彼らもまた、私にとつて遠さと近さとをかねそなえた他者であるのに違いない。

経団連が事務局を務めている各種奨学金運営団体の活動により、毎年高校生から大学院生までの多様な奨学生が留學し、今日、その経験を活かして内外のさまざまな分野で活躍している。本コーナーは、留學先での経験と現在の活動の模様を紹介することにより、これら奨学生を送り出してきた奨学金運営団体への一層の理解促進と、支え、協力してくれた企業への活動報告とするものである。

国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長 故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界二八カ国の大学・大学院へ一四一名の日本人留學生を派遣するとともに、世界三五カ国三八八名の外国人留學生への奨学金の供与や文化教育面での事業運営を実施してきている。

お問い合わせ・連絡先
経団連社会本部 人材育成グループ

森山 工

もりやま たくみ



広島市立大学国際学部助教授

国際文化教育交流財団第12回生（1987年度）。84年東京大学教養学部教養学科卒業。86年同大学大学院社会学研究科修士課程修了。87～90年マダガスカル大学文学部歴史学科留学。94年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士（学術）。広島市立大学国際学部専任講師を経て、97年より現職。

一九八七年十月から三年間、私はマダガスカル大学文学部歴史学科の留学生として、アフリカ大陸東南の沖合の島国、マダガスカル民主共和国（現マダガスカル共和国）に滞在した。文化人類学を専攻していた私としては、留学先の大学で現地の文化を学ぶことはもとより、留学期間を活用して特定地域での現地調査（フィールドワーク）に従事することに大きな関心をいだいていた。現地調査については、マダガスカル内陸北東部を調査対象地域と定め、八八年三月にはじめてこの地に足を運んで以来、留学期間を通じて断続的に調査を行なった。ここでの調査はその後も、機会があるたびに継続しつつ、現在に到っている。

なぜマダガスカルなのか、とはよく尋ねられることであるが、これという必然性はなかった。自分にとってあまりにも自明であるがゆえに、あえて問題にしようと思いつくことすらないような自己の存在の足元、それを相対化することに惹かれていた。文化人類学を専攻したのも、異文化の理解を旨

とするこの学が、異文化という他者を通じて自己を相対化する契機を与えてくれると思われたからである。このような、ある意味で一般論的な関心に導かれていた私にとって、その異文化がマダガスカル文化となったのは、複数の偶発的な出来事や状況やらの重なりの結果であったのにすぎない。

隔たりと他者性

アフリカは、日本にとっては遠い場所である。マダガスカルもその例に洩れない。単に地理的に隔たっているのみならず、われわれがそれについて与えられたり、それについてアクセスしうる情報や知識の質と量からみて、心理的にも遠い場所である。この隔たりは容易に文化的な隔たりのイメージを、極端に異なる他者の像を、喚起することになるだろう。

実際、その一見遠いマダガスカルというフィールドで、他者との隔たりを現実のものとして思い知らされたことは一再ならずある。調査地をスクーターで移動中に、街道沿いのある村で転倒し、大腿

骨を骨折したことがあった。駆けつけてくれた村人たちは、その私に對して、町の病院に行くことを思いとどまらせ、自分たちの知る呪医のもとへ赴くべきことを主張した。神や祖先や聖なる霊への祈りとともに患部を撫でさする、その呪医の文字通りの「手当て」の効果も村人のように信じていることもできず、かといって今や村人の介助なしではどこに行くこともかなわず、このときの村人たちの申し出は、そしてその背後に見え隠れする彼らの世界観の一端は、受け入れがたさと抗いがたさという二重の抵抗感を伴いつつ、私を繭でくるみ込むかのように緩やかに縛りつけた。

このあからさまな抵抗感のなかに現実化する他者。けれども、その同じ他者が、生活の他の側面においては、それとは気づかれぬほどのかすかな抵抗感しか生むことなく、私とその時々との関係を取り結ぶ。世間話に花を咲かせるとき。悩み事やら心配事やらを打ち明けたり、打ち明けられたりするとき。夜の町や村を連れだつて飲み歩く